

## 2018年度ユニーク卒論

文 学部

担当教員名	宇和川 雄
論文執筆者名	平井 葉月
論文の題 (テーマ)	東ドイツのアート・フィルムポスター研究——社会主義政策と〈手書き表現〉
簡単な内容 (概要)	<p>1970年代の東ドイツで花開いた、「アート・フィルムポスター＝芸術作品としての映画ポスター」。本論文はその独自のスタイルの魅力を解き明かそうとした文化史研究の試みである。論者は一方ではポスター史の歴史的展開をたどり、他方では戦後の東ドイツの文化政策（検閲制度）を調査し、東ドイツのアート・フィルムポスターの特徴である〈手書き表現〉がなぜ生まれてきたのかを考察している。結論としては、東ドイツの国営企業が制作を手掛けていた社会主義体制下であったからこそ、自由で豊かな表情を持ち合わせたアート・フィルムポスターが誕生しえた、その理由が明らかにされている。</p>
推薦の理由	<p>平井さんがこの卒論を書くきっかけになったのは、美術館で見た一枚の映画ポスターだった。その作品を手掛けたのは、旧東ドイツのデザイナー、エアハルト・グリュットナー。その作品に一目惚れをした平井さんは、それからグリュットナーの作品研究をはじめ。とはいえ、グリュットナーは、日本はおろか本国ドイツでもあまり知られていないデザイナーである。関連する資料は国内にはほとんどない。ましてや、「アート・フィルムポスター」というジャンル自体、先行研究の少ないニッチな領域である。当然、研究は思うようには進まない——かに思われた。しかし、ここから平井さんは奮起する。グリュットナーの作品を理解するためには、まずその背景にある東ドイツのアート・フィルムポスターの歴史を理解しなければならない。さらに、アート・フィルムポスターの歴史を知る上では、そもそもポスターの歴史を調べなければならない。平井さんはドイツ語の資料を読みながら、どんどん問いを立てていく。ポスターが、アート（芸術）になったのはいつからなのか？ 1970年代の東ドイツのアート・フィルムポスターは、例えば同時代のチェコやポーランドのそれとどのようなスタイルの違いがあるのか？ 東ドイツに固有のスタイルは、いつ、どのようにして確立されたのか？ かくして、東ドイツのアート・フィルムポスターについてのスケールの大きな研究調査ができあがった。問いは大きく膨らんだが、焦点はひとつである。すなわち、すべての問いはエアハルト・グリュットナーの作品解釈、その〈手書き表現〉の魅力の解明へと収斂する。論証は大胆かつ緻密であり、何よりも未知の研究対象を「もっと知りたい！」という熱意に溢れている。グリュットナーという、日本では無名の作家を紹介した功績は大きい。未だ研究されていないものを研究し、解き明かそうとするその姿勢は、まさに「ユニーク論文」にふさわしいものだと言えるだろう。</p>